

ゆめにしあ

夢日記

だから、包丁で刺した。何度も。

何度も。

上にまたがり腕を振り下ろす。

重い。軽い。サクサク。ドスドス。

その崇高な儀式はやがて興奮が収まるとともに単純作業へと墮落する。

腕が疲れた。親指の付け根は包丁で何度も切れてすでにグチャグチャだ。それでも、痛みと疲れに耐えて腕を持ち上げては振り下ろす作業を繰り返す。

労働の後の心地よさ。そんなものはもう何年も味わってない。

倒れるときに腕を引っ搔かれた。

指を一本切り落とす。人差し指。

指を切り落とす。

中指。指を切り落とす。薬指。

小気味よく、リズムをつけて、一本一本。

指を切り落とす。今度は髪の毛が気になった。

私は鋏を取り出して倒れた男の髪の毛を切り取りそれを部屋中にまいた。

ヒラヒラ。

ヒラヒラ。

髪の毛は水面に着くと表面の油でそれ自体の軽さで水面一面に浮いて広まり、私は人の髪の毛から醤油を作ることが出来るという話を思い出して、今朝のみそ汁の風味を脳内で再現しようとチェス盤のようなチェック模様だった床に仰向けになった。

天井は眼でいっぱいだった。

そして私は眠りについた。

卵

胞

期

最近、おかしい夢を見る。

例えば、部屋の中で男と話してる夢。

白い壁が六面の正方形の中、ドアも窓もない部屋。男はパイプチェアに腰掛けている。私は彼の前で腰ぬけたように跪いて彼を見上げる。

なんでこんなに泣いているんだろう？

私は彼に促されて、つまらない話をしたのだ。そして泣いた。

その日見た恐い夢の話だったと思う。

その夢の中で私は何かに追われていた。追ってくるものが何かはわからないが、本能的に逃げていた。白い廊下の角を曲がり、鉄の非常階段を見つけ、まるでそれが当然であるように駆け上がった。一階上がるごとに、あいつらは途中の階から登ってこないだろうか上の階から降りてこないだろうか不安と恐怖で胸をつかえつかえしながら走った。

気がつけばもうかなりの高さまで来ている。ずっと白い壁だと思っていたものは実は霧だったらしい。いつの間にやら吹き始めた風が吹き飛ばしてしまった。非常階段の手すりは頼りなく、私は何故か次の一步で落ちてしまうのではないかと不安で不安でしかたなくて、しゃがみ込むとそこはデパートだった。無人のデパート。

本来活気があるべき場所だけに、無人の不気味さは際立つ。

誰もいないことはわかっているのに誰かいるような錯覚を覚えてしまう。並んだスーツの陰、カーテンの閉まった更衣室、メガネ店のカウンターの奥にある扉の向こう、エスカレーターの下にある自動ロッカー、積まれたカゴの後ろ。

立ちすくむ。

青果売り場の野菜の絵、無機質な白い蛍光灯。洋服店のオレンジ色がかった電球。

この空間は私を望んでない。

孤独

追手の正体がわかった。

逃げる。

恐い。

両腕で自分の体をかき抱きながら走る。爪が二の腕に突き刺さり、血が流れる。

かまわず走る。

婦人服売り場を駆け抜ける。Gパンが並んだ棚はうねうねと何処までも。エスカレーターを降りる。降りる。降りれば降りるほど暗くなっていく。

…帰れるだろうか。

かまわず走る。

不安が募る。吐きそう、押しつぶされそう。どうしてこんなにも不安を煽るのだろうか。もう嫌だ。こんな夢が見たいんじゃない。

私は…。

スーツ売り場を駆け抜ける。ネクタイはまるで行く手を阻む森のようで。

ピンポンと場違いな音。何処かでエレベーターの扉が開いたらしい。誰が呼んだのだろうか。

もしくは、昇ってきたのかもしれない。あいつらが。

森のように連なる服は、そのままエレベーターに直結していた。扉があいている。誰もいない

エレベーターに飛び乗った。

エレベーターの中は真っ白で、正面に男が、パイプチェアに座って微笑んでいた。

私は走ってきた勢いで、彼の前で腰ぬけたように跪いて、彼を見上げる。

息が整わない。怖い怖い怖い怖い。

彼は手を出した。私に話をするように促している。

涙腺が緩んだ。

あの人の前では泣きたくない。恥ずかしい。

安堵と疲れ。襲う眠気。

だから私は、追手である何か後ろから手を伸ばしても、何一つ抵抗できなかった…。

気がついたら自室のベットだった。寝違えたのか首が痛い。

嫌な夢だったなあと思いつつもすでにそれがどんな夢だったのかも忘れていた。夢ってそんなもんだと思う。何か漠然とした感情だけが残る。だから私は、本当は夢なんて見てないのではないかとも思う。起きた時や起きた後に創っただけとか。そんなときも何回かはあるんじゃないだろうか。

肩を抱いて二の腕を摩る。夏なのに寒い。鳥肌立っている。

立ちくらみに似たような眩暈を覚えながらベットから降りる。しわくちやの青いシーツ。こんな柄だっけ？ まあいいや。

お茶を飲み、口の渴きをうるおしながら朝食の準備。シリアルだけど。

テレビをつける。

映ったのは、白い部屋。

白い壁が六面の正方形の中、ドアも窓もない部屋。男はパイプチェアに腰掛けている。

私が駆け込んでくる。ドアなんてない。突然世界に介入したような感じ。

身を乗り出して画面に見入る。何故私が映っているのか。

画面にばかり意識を集中させていた私は、だから背後に立った何者かの気配に気がつかなかった。

首に手を回される。

力が込められる。

そうだ。あそこには危険はない。

私は、彼の前で跪いて、彼を見上げる。

私は、その画面に見入っていた。

そんな夢だった。

だから私は、逃げている。

本当は安全なところなんてないのではないか。

夢なのだ。私の。

全ては。

夢なのだ。

赤い眼、長い嘴、縞しまのセーター、青いスカート、人の手、鳥の足…。…。

階段を上る。二段抜かしで。

突き当たった扉を開けたら、デパートの屋上に出た。

どんよりと曇った空が突然現実的で驚く。

デパートの屋上はたいてい駐車場になっていると思っていたが、ここは違うらしい。おそらく人が来ることは想定されてない。それなりに壁は高いが、柵のようなものは一切ない。入口も私が入ってきたところだけである。

手に持っていた傘をさしたら、雨が降り始めた。

雨の日というのは気分が悪い。外に出る気もなくなってしまう。服は濡れたら体に張り付いて気持ち悪いし、部屋は生乾き特有の不快なおいで満たされてしまう。乾かない洗濯物なんかがあるとなおさらだ。それに…それに…、

とにかく不愉快だ。

もしくは…、

傘をさすから不愉快になるのかもしれない。

濡れないように、濡れないようにとすることから、濡れた時に不愉快になるのではないか。

ニャー…。

屋上の縁、エアコンの室外機の上に黒猫がいる。眼だけが翡翠のように輝いている。

こちらを一瞥しただけで、眼が合うとそっぽを向いた。

猫には雨は不愉快なのだろうか？ この子は違うのだろうか。室外機の上に座って、雨など気にせず眼下の町を見下ろす。

黒猫というのは、いつも何処か立体感がないような気がする。

そこにいるという現実味がない。突然街角ですれ違ったりしたときなんかは特にそうで、その光景をいくら思い出してみてもその映像には現実感は伴わない。何処か漫画らしく、もしくはエフェクト加工された映画らしく…。

猫は、そこにいるのが飽きたのか、一度伸びをして、そして

跳んだ。墜ちるよなあ、と思った。

でも、猫なら大丈夫なのかもしれない。猫は着地できるのだから。

——Cat has nine lives.

鈍い音は意外と大きかった

気がついたら自室のベットだった。寝違えたのか首が痛い。

嫌な夢だったなあと思いつつもすでにそれがどんな夢だったのかもはっきりと覚えてなかった。夢ってそんなもんだと思う。何か漠然とした感情だけが残る。だから私は、本当は夢なんて見てないのではないかとも思う。起きた時や起きた後に創っただけとか。そんなときも何回かはあるんじゃないだろうかと思ってしまう。

…夢だったのだろうか。猫が飛び降りた直後からベットの上へと記憶が連続している。だから、夢であるのだろう。しかし、黒猫のせいだろうか、夢であったということすら認める気にならないほど現実感が欠けていた。

夏なのに寒い。私はベットから降りる。しわくちやの青いシーツ。こんな柄だっけ？

お茶を飲み、口の渴きをうるおしながら朝食の準備。

テレビをつける。

画面いっぱい猫の死体。

飛び散る血、はみ出る腸、皮膚を突き破って露出した骨。それは猫の原型を留めてはいなかった。つぶれてぺたぺたになった毛皮の上に、遠慮がちに頭部が乗っかっていて、少し離れたところまで脳漿がたれていた。降り続く雨は血や脳や尿や糞やその他の体液をすべてぐちゃぐちゃに混ぜて流していく。赤色系統のグラデーションがマーブル模様の水溜まりをつくった。不愉快だなあと思いながら朝食を済ます。歯を磨きながら、昨日見た変な夢について考える。屋上で猫が飛び降りて、

そのあと、下を覗き込む私を見上げたのは…

赤い眼をした「何か」。

赤い眼、長い嘴、縞しまのセーター、青いスカート、人の手、鳥の足…。

つぶれたばかりの猫の横で、所在なさげに猫が落ちてきた方を見上げていた。そいつと眼があったのだ。薄気味悪かった。背中を悪寒が突き抜けた。そして私の首には手が掛けられていて、気がつくとも屋上は「あいつ」でいっぱい、

いつまで続くのだろう。

真っ暗なベランダに出て夜のうちに乾かしておいた洗濯物を取り入れる。

ジャージが三枚。

それをかごに入れて室内に放ると、再びベランダへ。

エアコンの室外機の上に乗る。

そして一歩踏み出した。

鈍い音が

最近、おかしい夢を見る。

例えば、部屋の中で男と話してる夢。

白い壁が六面の正方形の中、ドアも窓もない部屋。男はパイプチェアに腰掛けている。私は彼の前で腰ぬけたように跪いて彼を見上げる。

壁や天井には眼が沢山で、私は不安で不安で仕方ない。

私は持っていた包丁で、試しに一個、手ごろな高さにあった眼球を潰してみることにした。ふらふらと歩きながら物色する。一つの眼球を選んだ。刃を突き立てると、軽く手に抵抗を感じる。もう少し力を入れると、プチッという小気味のいい音とともに一気に刃が入った。膜のイメージ。

処女膜を突き破るように。

私は出来る限りの優しさを込めて、包丁を壁に突き立て眼球を一つ一つ丁寧に潰していく。

プチッ…プチッ…プチッ…

プチッ…プチッ…プチッ…プチッ…プチッ…プチッ…プチッ…プチッ…

執拗に、丹念に。

一種のエクスタシーのようなものを感じながら。

私は女性でありながら、膜を突き破るという行為に明らかに興奮していた。

破けば破くほど、眼球にいとおしさが湧いてくる。

床にうつぶせて、下のほうまで綺麗に潰していく。

プチッ…プチッ…プチッ…プチッ…

高いほうも、手が届く範囲はすべて潰す。

プチッ…プチッ…プチッ…プチッ…プチッ…

とりあえず、壁の一面を潰し終えた。

「あの女、が昨日見た怖い夢の話をも男にしているのを聞きながら、同じ要領で他の壁の眼も潰していく。

四方全て。

私はうまく潰すことができただろうか。

床に包丁を突き立てる。チャックを開けるように、三メートルほどの切り込みを入れた。

エレベーターの動く音。もうすぐ「あいつ、は、エレベーターに乗ってここに来るのだろう。

私は床に出来た裂け目に飛び込んだ。

暗い闇の中を墜ちていく。闇とともに墜ちていく。

ドロリ、と。ゆっくりネバネバと。

重油のようだ。

あそこで寝ているのは、だ。

闇が顔にかかってしまって不愉快そうに眼を擦っている、あれはだ。

私は「あいつ、とすれ違った。

すれ違うときに、寝起きの「と眼があった。

気がした。

ドロリ、と吐き出される。そこは学校。

見覚えは無いし、全く学校の様ではないのに、何故か私はそこを学校だと思い、また、過去に来たことがある場所だと思った。

その部屋には、沢山のベッドがあった。

沢山、均一に。ベッドベッドベッド。

そして私は、そこで一人で給食を食べている。それは病人が食べるような、ほとんどが水分の粥。澱粉が溶け込んだお湯だ。甘くてベトベトする白濁色。我慢して飲み込む。

不味くてまずくて、どうして最後の一口が飲み込めない。

アルミのトレイの上にアルミのお椀を置くと、私は28行目の25列目、ほぼ中央のベッドに横になった。

しだいに意識が遠のき、私は先ほど食べた粥が残した口の中の甘ったるさだけになっていく。

目を覚ます。もしくは夢の世界に入る。

そこは実家の裏の隠居。

現在の実家は、隠居の前に建てられた。何故か残された隠居は今は物置代わりに使われている。埃臭い。

ここは、小さくて急な階段を上ったつきあたり、右側の部屋。この部屋は東向きに位置していて、いつでも暗かった。壁際に、誰のものだったのかもわからない古い学習机が置かれていた。机の上に貼られた女の後姿が描かれたシールと、古い三ツ矢サイダーの缶でつくられた鉛筆立てが印象的で、良く記憶に残っている。だが、そこに座った記憶は無い。

恐かったのだ。

机の下のいっそう暗い部分が。影が一層濃くて、どんなに目を凝らしてもそこに何かあるのか、ないのか。

幼心に、恐かったのだ。

窓のところに虫がひっくり返って死んでいた。

洋服ダンスと壁との間に、何故か40センチほどの隙間が開けられていた。何処か不安定な印象を受ける。

私は、その隙間に体を滑り込ませた。

イメージの連続！ 脳裏に映るものなのか、今視覚しているものなのか。

幾多ものフラクタル！ 幾何学のイメージが駆け巡る。

時にそれは海のように、時にそれは火のように、時にそれは何物でもない無意識であった。

最近、おかしい夢を見る。

例えば、部屋の中で男と話してる夢。

を見ている ` ` の夢。

白い部屋、赤黒く染まったシーツのベッドの上、幸せそうに寝ている `あいつ、を眺めている夢。

私は `あいつ、がぐっすりと眠っていることを確認すると、なんだかひどく安心した。そして、歩きだす。白い部屋は、私が歩けば歩くだけ空間が広がった。まるで限界など無いようで。

しばらく行くと、唐突に仮設トイレがあった。わたしは扉を開けて中に入ると、先ほど捕まえた大きな蝶を後ろポケットからとりだして、トイレに流した。水がつくる渦に蝶が吸い込まれていく。綺麗な幾何学模様を書きだしていた鱗粉は、くしゃくしゃになってボロボロになって、蝶はもう二度と飛べない体になって、最後には下水道に吸い込まれた。

綺麗な姿、優雅な飛行を奪われた。

仮設トイレから出る。そこは駅のホームだ。

ちょうど電車が来たようだ。

駅のホームには誰もいないのに、ガヤガヤガヤガヤと人の声が響く。

みんながみんな勝手に話していて、その声を掻き消すように電車がホームに入ってくる。

私の目の前で十号車のドアが開いた。乗り込む。私以外の客はいない。でも、ガヤガヤガヤガヤ…。うるさいとは思うけど、一人で電車で揺られているのは何処か不安だからそんな声でも頼もしいと…思う。道中の寂しさは紛れる筈だ。

適当に座る。

窓の外では電車のスピードに追いつけなかった光たちがヒュンヒュンと遠ざかっていく。誰かが付けた窓ガラスの指紋が気持ち悪くて仕方ない。

一つ目の駅には、電灯が一本立っているだけだった。

二つ目の駅では、月明りがとても眩しかった。

三つ目の駅からは、大きな十字架が見えた。

四つ目、大熊座が見えた。

五つ目、北極星…。

六つ目、…。

……。

…。

そして私は、ウトウトと眠りに着いた。

電車の揺れが心地よい。

いや、この揺れは…車の中だ。たぶん。

さっきからよく揺れる。車体も少し傾いているから、山道に入ったのだろう。

楽しみにしていたスキーの日。私は後部座席で横になってウトウトウトウト。

もうすぐ着くだろうか。まだ遠いだろうか。

となりの女の子は誰だったろうか。

思い出せない。

最近、おかしい夢を見る。

例えば、部屋の中で男と話してる夢。

白い壁が六面の正方形の中、ドアも窓もない部屋。男はパイプチェアに腰掛けている。私は彼の前で腰ぬけたように跪いて彼を見上げる。

天井には眼が沢山の、私は不安で不安で仕方ない。

彼は笑っていた。私は能天気な笑っている彼にイラツとして、包丁を構え、そして刺した。

腹を押しえてよろける。顔つきは一変した。

引き抜く。とくとくとく。血が彼の白いシャツを染めていく。

足りない。何度も刺す。

白い顔が余計に白くなって、彼は痙攣を始めた。

床を転げまわる。

頬についた返り血の温かさに一仕事終えた充実感を覚えて、私は部屋を出た。

白い壁を超え、白い光に包まれながら歩く。命の原風景だ、とかボンヤリ考える。この先には…。

光の奥にある暗闇。

森だ。夜の森。森と光の境界線がはっきりしていることに違和感。

私はそこで歩みを止める。

ここには私の敵はいなかった。ここに居れば安心なのだ。

ずっとここにいたい。

仰向けになる。このまま寝てしまおうか。

私は光の中で眠りについた。

光の中で寝ている夢を見た。

せつかく気持ちよく寝ているのに、誰かが光の天井を真っ二つにした。

闇が流れ込んできて、私の頬を濡らした。

頬についた闇の温かさが不愉快で仕方がない。

仕方なく眼を開けると、墜ちてくる「あいつ」と眼があった。

気がした。

飛び降り自殺をした人をビルの中で見る人もいる筈である。線路に飛び込んでグチャグチャ

になっていく何かを目撃する人よりは少ないかもしれないが、それでもいる筈である。電車に轢かれるのはどうだろうか。誰かが撮った写真にたまたま映り込むなんてことは無いのだろうか。

黒くてドロドロした液体が私を覆っていく。眼球が、鼻孔が、呼吸器が、皮膚全体が、乳房が、性器が、犯されていく。

気持ち悪い。もがけばもがくほど絡まって、液体と自分との境目が不明瞭になっていく。絡みとられていく。引き摺られていく。不明瞭且つ判断困難。どちらが上で此処は何処で誰が自分なのか。何処に行って誰と話して何と名乗ればいいのか。今日はいつで今は夜で明日が昼なのか。またはそうでないのか。

そんな不快な夢だった。

私は壁に顔がたくさん書いてある悪趣味な部屋で目覚める。目の絵、鼻の絵、ギザギザに伸びた歯の絵、血が止まらない口の絵、三つに千切れた耳の絵。そんなものが果てしなく何処までも書かれて居る。しかも大層な立て札には「触らないでください」。絵を見ながら、壁に沿って歩いていく。段々と一つ一つのモチーフが大きくなって、

ふと、頭をよぎること。

最近、おかしい夢を見る。

例えば、部屋の中で男と話してる夢。

私は涙を見られたくなくて、来た道を引き返そうと、エレベーターに乗って下へ下へと墜ちていく。

無人のデパート、一階。

ドアを潜れば、曇天の下。

久しぶりの空。記憶の中の、多分最後の空。

ポツ…ポツ…。

雨が降る。

ザー…ザー…。

目の前に…

猫が墜ちてきた。

ぐしゃり。

だったか、

パン。

だったか、

よくわからない音が頭にこびり付く。よくわからない癖にやたら鮮明に頭の中で響いて、

飛び散った何かが顔について、反射的に目をつぶる。

目を開けると、

飛び散る血、はみ出る腸、皮膚を突き破って露出した骨。つぶれてぺたぺたになった毛皮の上に、遠慮がちに頭部が乗っかっていて、少し離れたところまで脳漿がたれていた。降り続く雨は血や脳や尿や糞やその他の体液をすべてぐちゃぐちゃに混ぜて流していく。赤色系統のグラデーションがマーブル模様の水溜まりをつくった。

飛び散る血、はみ出る腸、皮膚を突き破って露出した骨、つぶれてぺたぺたになった毛皮の上に、遠慮がちに頭部が乗っかっていて、少し離れたところまで脳漿がたれ、降り続く雨は血や脳や尿や糞やその他の体液をすべてぐちゃぐちゃに混ぜて流して赤色系統のグラデーションがマーブル模様の水溜まりをつくった。

上を、見上げる。

「あいつ、が、こっちを見ていた。」

屋上の縁から身を乗り出して、こっちを見ていた。

多分そうだ。「あいつ、が猫を落としたんだ。」

ようやく意識に吐き気が追いついた。

そして、ゆっくりと気を失っていくその最中、何かを思い出した…

ような気がした。

最近、おかしい夢を見る。

例えば、部屋の中で男と話してる夢。

私は壁に顔がたくさん書いてある悪趣味な部屋で男と向かい合っている。

壁に書かれた口の中に飛び込む。

イメージの連続！ 脳裏に映るものなのか、今視覚しているものなのか。

幾多ものフラクタル！ 幾何学のイメージが駆け巡る。

時にそれは海のように、時にそれは火のように、時にそれは何物でもない無意識であった。

そして残ったのは、透明な白。純粹に透明な白。白という色はこの世に表出した時点で穢れているのだと何かで読んだことがある。

白い光に包まれながら歩く。命の原風景だ、とかボンヤリ考える。まだ表出されてない白。真っ白。その中を、歩いていく。

光の奥にある暗闇。

森だ。夜の森。森と光の境界線がはっきりしていることに違和感。

この先には、何があるんだろう？

本当は見たくない。知ってるから。

最近、おかしい夢を見る。

例えば、部屋の中で男と話してる夢。

白い壁が六面の正方形の中、ドアも窓もない部屋。男はパイプチェアに腰掛けている。私は彼の前で腰ぬけたように跪いて彼を見上げる。

天井には眼が沢山で、私は不安で不安で仕方がない。

彼は笑っていた。私は能天気な笑っている彼にイラッとして、包丁を構え、そして刺した。

腹を押さえてよろける。顔つきは一変した。

引き抜く。とくとくとく。血が彼の白いシャツを染めていく。

足りない。何度も刺す。

白い顔が余計に白くなって、彼は痙攣を始めた。

床を転げまわる。

頬についた返り血の温かさに一仕事終えた充実感を覚えて部屋を出ていく私を見送った。

彼が立ち上がった。

まだ微笑んでいる。

「終電です、終電です」

肩を揺さぶられて、ようやく寝てしまっていたのだという事に気がつく。

頭がクラクラフワフワする。手が鉛のように重い。切れた指の付け根が痛い。口が渴いて喉の辺りに貼りつくような不快感。重力に逆らいなんとか立ち上がる。脚が重い。一歩踏み出すのにもすごく根気がいる。一歩、また一歩。ドアへと歩いていく。

そして私は…。

排卵期

扉をくぐると、
私はいつもの部屋にいる。

そうか、夢を見せてくれるんだ。
最後だから。

白を基調にした部屋。
白黒のポスターには『たのしかったね』『大好きだよ』『ずっといっしょ』。
銀色の机に座り、書類を読むあなた。白衣。
無機質な部屋、唯一の有機物。
全て何処か色褪せた夕焼け色。

——私は、私はもう大丈夫だから
——もう、ここには来ないから
——だから先生、
——最後に一度だけ、手を繋いで歩きたい。

先生の表情が変わった。それが驚きの表情だったのか、悲しみの表情だったのか、夕焼け色の薄暗い室内で私は判断が出来なかった。

カウンセリングにおいて、身体接触はタブー。
患者の依存をひきだしてしまうから。
ましてや私はこの学校の生徒だ。

私は大切にされている。
他の娘とは違うんだ。
それを確認したかった。
確認できれば、私が誰かに必要とされていると確認できれば、生きていけると、
そう考えていた。
いま考えれば、それこそ依存に他ならない。
むちゃくちゃだ。

でも、そのときの私は、そう信じていた。

私は、あなたと手を繋いで、夕焼けの住宅街を歩く。
全然ロマンティックでも何でも無いけど、手を繋いでもらえたという事、それだけでとても幸

せだった。

ほんの一区画。

たったの十分。

でも、これ以上の幸せなんて、たぶんもうないだろう。

私は特別。

先生はタブーを犯してくれた。

私の手を握って歩いてくれた。

私が特別な存在だから。

黄 体 期

思い出す。

おかしい夢を見る。

例えば、部屋の中であなたと話してること。

例えば、昔飼っていた猫が死んでしまったこと。

例えば、ホントはもっと一人で寝ていたかったこと。

例えば、ホントは生まれて来たく無かったこと。

例えば、昔飼ってた猫を殺してしまったこと。

例えば、死んでしまった妹のこと。

例えば、あなたを殺してしまったこと。

あなたと手を繋いで歩いた日のこと。

話したい。

全部話すから、

聞いてほしい。

でも、もう行かなくちゃ。

私にはもう耐えられない。

血に塗れた衣服の不快感も。

親指の付け根の痛みも。

部屋中を満たす不愉快な匂いにも。

犯してしまった私の罪にも。

もう誰も私を必要としない世界にも。

ベランダに出る。

夢の中であんなに曇っていた空は、皮肉にも満天の星空。

もう、さよならなのに、涙も出ない。

私は手すりを乗り越えて、

一歩、踏み出した。

——さよなら。先生